

[原著論文]

「超越」という視座
—オルコット教育思想における超自然主義的原理と自然の
一元化—

山本 孝司

【要旨】

19世紀のアンテベラム期にニューイングランドにおいて生起した思潮である超越主義 (Transcendentalism) は、1830年代半ばから1840年代半ばにかけて、宗教、文学、哲学および社会改革運動において影響力をもった。この思潮は、その呼称に含まれる「超越」 (transcendental) という言葉との関連で、ドイツ超越論的観念論からの影響が指摘される。

伝統的に哲学では、感覚に基づく実在の定義と真理および実在の探求における思惟作用のいずれに力点を置くかによって、前者を唯物論、後者を唯心論として理論展開してきた経緯がある。

19世紀ニューイングランドにおける超越主義も、こうした哲学史の動向に影響されつつ、生起し展開してゆくのであるが、彼らの説く「唯心論」は、ドイツを中心としてヨーロッパで展開された観念論とは異なる発展をみせている。超越主義の自然観は、自然は人間精神の顕れであり、それは同時に神であるという、ある種の一元論である。こうした自然観は、認識において外界を精神の延長と捉える点で、ドイツ観念論的認識論的であるが、そうした外界＝精神と神とを直結させることにおいては、近代の認識論とは一線を画していたといえる。

本稿では、近代哲学思想という「大きな流れ」のなかで、思潮としての超越主義が持ち得た妙味を明らかにすることを企てる。その際に、超越主義思想のなかでも、教育という実践的領域において活躍したブロンソン・オルコット (Amos Bronson Alcott, 1799-1888) の思想を採りあげることで、より、哲学上、ニューイングランド超越主義の思想的特異性を明らかにすることを目的とする。

キーワード：超越主義 超自然主義的原理 自然 自己超越 オルコット

I. はじめに

1. 課題設定

19世紀のアンテベラム期にニューイングランドにおいて生起した思潮である超越主義 (Transcendentalism) は、1830年代半ばから1840年代半ばにかけて、宗教、文学、哲学および社会改革運動において影響力をもった。この思潮は、その呼称に含まれる「超越」 (transcendental) という言葉との関連で、ドイツ超越論的観念論からの影響が指摘される。超越主義のリーダーであるエマソン (Ralph Waldo Emerson, 1803-1882) 自身は、講演「超越論者」 (Transcendentalist) のなかで「『超越思想』とわれわれの間

で一般に呼ばれているのは、実は『唯心論』です。……現代の『唯心論』が『超越的』という名称を得たのは、もともとケーニヒスベルク生まれのイマニュエル・カントがそういう表現を用いたことに由来します」¹⁾とカント哲学との関連を示唆している。

伝統的に哲学では、感覚に基づく実在の定義と真理および実在の探求における思惟作用のいずれに力点を置くかによって、前者を唯物論、後者を唯心論として理論展開してきた経緯がある。とりわけ17世紀のデカルト (René Descartes, 1596-1650) 以降、認識論の中心的テーマは認識主体としての精神 (理

性)に関連づけられ、精神(理性)のつくりだす観念と外界の实在の一致の根拠づけが課題とされるようになる。このような観念と实在の一致という「確実な知」が生得的な次元に設定されるか否かという違いはあるものの、ロック(John Locke, 1632-1704)の認識論哲学も、基本的にはデカルトの方法的懐疑による認識論を継承するものであった。このような哲学思潮のなかで、カント(Immanuel Kant, 1724-1804)の登場は、自身が「コペルニクスの転回」(Kopernikanische Wende)と呼ぶように、外界における实在と精神のつくりだす観念との一致ではなく、認識主体の側における認識のカテゴリーの設定によって、外界の实在については不問にすることで認識における主客問題は解消してしまった。ただしカントにあっても主体と客体は以前として分離されたままであり、近代の認識論は主客二元論として特徴づけられる。

19世紀ニューイングランドにおける超越主義も、こうした哲学史の動向に影響されつつ生じ展開してゆくのであるが、彼らの説く「唯心論」は、ドイツを中心としてヨーロッパで展開された観念論とは異なる発展をみせている。このことに関しては、上に引いた講演の冒頭でエマソンがすでに「……それは新しいものではなくて、思想のなかでもいちばん古いものがこの新しい時代の鋳型に流し込まれた」²⁾と指摘していることからもうかがえる。超越主義は、端的に言うと、自然を精神の象徴として捉え、自然の内奥に神性を見出すことをその思想的特徴としていた。こうした自然観は、表現は異なるものの、超越主義者たち全体に共有される観念であった。自然は人間精神の顕れであり、それは同時に神であるという一元論は、認識において外界を精神の延長と捉える点で、ドイツ観念論的認識論的であるが、そうした外界＝精神と神とを直結させることにおいては、そうした認識論とは一線を画していたといえる。

謂わば本家といえるドイツ観念論哲学とは異なる発展をもたらした要因としては、ニューイングランド超越主義のもつ、すぐれて実践的性格にあったといえよう。フロシingham(Octavius Brooks Frothingham)はその点について次のように述べる。「超越論哲学は、ドイツにおいては教養ある人々に受け入れられ多数の熱心な思想家たちによって講壇で教えられた。イギリス

では、この哲学は、詩や芸術に影響を与えた。両国とも、この哲学は組織された団体、実践的な勢力といった意味での社会的影響を及ぼすことはなかったし、人々の日々の生活からは隔離したままであった。しかし、ニューイングランドにおいては、外国人の思想家によって企てられたこの哲学は、土着の思想と結びつき、社会生活上、あらゆる形態の中で開花した³⁾。ドイツ観念論哲学は主として大学で講じられる講壇哲学という性格が強かった。カント、フイヒテ(Johann Gottlieb Fichte, 1762-1814)、シェリング(Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775-1854)、ヘーゲル(Georg Wilhelm Friedrich Hegel, 1770-1814)、いずれも大学で教鞭をとることによって、自らの哲学思想を普及させていた。こうした彼らの思想は、イギリス常識哲学、イギリス・ロマン派文学やフランス折衷主義哲学を経由して、ニューイングランドに輸入されるのであるが、その際にニューイングランド超越主義にとってはイギリス・ロマン派による影響が強かった。具体的にはカーライル(Thomas Carlyle, 1795-1881)、コールリッジ(Samuel Taylor Coleridge, 1772-1834)の文学である。カーティ(Merle Curti)が指摘するように、ニューイングランド超越主義は、「ある意味ではロマン主義運動の一部をなすものであった。それは十八世紀の合理主義にたいする反抗であった」⁴⁾。カーティが指摘する、まさにロマン主義的要素こそ、ニューイングランド超越主義の特徴であり、この要素が本家であるドイツ観念論哲学と区別される一因となっていた。

他方で、ヘルチェ(H.H. Hoeltje)は「いずれにせよ、ここに新しい精神に関する思想、アメリカ超越主義が起り、こうした思想は、名前を与えてくれたカントに負うというよりも、プラトニストやキリスト教神秘主義のなかに起源をもつ」⁵⁾と述べ、ニューイングランド超越主義へのプラトニズムの影響を重視する。

いずれにしても超越主義の思想的源流は諸説あり、どの説も部分的には首肯可能な内容を含んでいる。本稿では、こうした諸説を頼りとしながらも、近代哲学思想という「大きな流れ」のなかで、思潮としての超越主義が持ち得た妙味を明らかにすることを企てる。

その際に、超越主義思想のなかでも、教育という実践的領域において活躍したブロンソン・オルコット (Amos Bronson Alcott, 1799-1888) の思想を採りあげるにより、哲学上、ニューイングランド超越主義の思想的特異性を明らかにすることを目的とする。オルcottの超越主義思想に包摂される観念には、プラトン (Platon, B.C. 427-347)、プロティノス (Plotinus, 205-270)、プロクロス (Proclus, 412-485)、カント、コールリッジやカーライルといった思想家、クエーカーリズムや東洋思想の影響が見出される⁶⁾。

2. 先行研究および考察の視点

超越主義思想の哲学史的な位置づけに関してはすでに述べたが、宗教史的な位置づけに関しては、フロシガム、ゴッダード (Harold C. Godderd) の「超越主義」を主題にした研究をはじめ⁷⁾、ピューリッツァ賞受賞文化史家パリントン (Vernon L. Parrington) の『アメリカの思想主潮流』 (*Main Currents in American Thought*)、あるいはアメリカ宗教史家オールストローム (S.E. Alstrom) の『アメリカ神学思想史入門』 (*A Religious History of the American People*) のように、ユニテリアニズム (Unitarianism) の亜種として紹介されるのが通例である⁸⁾。

各論としてみると、超越主義者個々人の思想に関しては、エマソン、ソーロー (Henry David Thoreau, 1817-1862) といったカノン作家については、文学を中心にそれぞれ多数研究が存在する。そのなかで、本稿で採りあげるオルcottに関しては、彼が超越主義者のなかで唯一継続的に教師として学校教育に携わった経験をもつため、教育史の領域で彼の名前があがることが多い。教育史研究においてはオルcottへの思想的影響は、彼が「アメリカのペスタロッチ」 (the American Pestalozzi) という呼称をもつこともあり、教聖ペスタロッチ (Johann Heinrich Pestalozzi, 1746-1827) との関連で論究されてきた⁹⁾。

なるほど1825年以降、主としてウィリアム・ラッセル (William Russell, 1798-1873) が編集した『アメリカ教育雑誌』 (*American Journal of Education*) を通してオルcottはペスタロッチ思想を受容している。しかし、ヘフナー (George E. Haefner) が

「オルcottの観念論哲学は、決して組織化された、論理的なもしくは完璧な体系ではなかった。オルcottの思想は、様々な源泉からもたらされたもので、そのうちのあるものは部分的に他のものと矛盾していた。しかしオルcottは、こうした矛盾を一つのまとまりある体系のなかに和解させていくようなタイプの思想家ではなかった」¹⁰⁾ と指摘するように、ある一面からのみの影響関係で捉えられるものでもないし、影響因子自体が論理的整合性をもっていない場合もある。

本稿では、こうした難点を断つたうえで、オルcottの超越主義思想を、思想形成段階、発展段階という枠で論考し、人間形成の視点からみた「超越」の特質を明らかにし、併せて、近代哲学思想史のなかでの超越主義の特異性を浮き彫りにしたい。

考察の手続きとしては、IIにおいてクエーカーリズム、プラトン哲学から受けた影響を中心にオルcottの超自然的思考様式の形成過程をみとうえで、IIIでは1830年代以降のニューイングランドにおいて花咲いた思潮超越主義の文脈の中にこうした超自然的思考様式の発展を究明する。そしてIVでは、オルcottによる人間形成論 (教育論) への超自然的思考様式の援用を考察することによって、超越主義に内包された、古代ギリシア以来のヨーロッパ思考様式に根強く影響している二元論を超克する試みを読み取りたい。こうした作業が、先行研究では明らかにされてこなかった、近代哲学思想史における超越主義思想の特異性を明示することにもつながると同時に、超越主義の掲げる「超越」概念を具体的実践レベルで捉えることが可能となるとの目論みをもつ。

II. 超自然主義的思考様式の形成

本節においては、オルcottの思想形成のうち「超自然主義的思考様式」に焦点を当て、影響関係をクエーカーリズム、プラトン哲学に焦点化し述べる。とりわけこうした思考様式は、彼にとって19世紀当時のアメリカ精神に支配的であったピューリタニズムを克服するうえで重要な意味をもっていた。

1. 克服の対象としての自然

17世紀にはじまる植民地時代以降、アメリカにおける精神史ではピューリタニズムが支配的であり、

人々のもつ人間観、自然観に強く影響していた。植民地アメリカにおいては、物理的にも精神的にも自然は支配の対象とされ、人間の内なる自然（本性）も否定される傾向にあった。ピューリタンたちは、人間のもつ原罪（original sin）を強調することを通して、人間の卑小さと対比することで神の偉大さを説いた。

こうしたピューリタン的人間観のもと、子どもたちは徹底した自己否定を通して神による救いを求めるよう教育されていた。具体的実践レベルにおいては、子どもたちの内面的自由は抑制され、子どもの自然な本性たる「子どもらしさ」は克服の対象とされた。このような観念から教育過程において、子どもたちの自由な思考、表現は否定され、彼らの自然性を強制する手段としての体罰が奨励されていた。人間の自律が否定されたという意味合いでは、ピューリタンたちの描いた人間像は、近代が掲げた自律的人間像とは趣を異にしていたといえる。

19世紀に至り、超越主義者たちはピューリタン的人間観、自然観とは真っ向から対立する観念を説くのであるが、オルコットの場合、二つの重要な契機となるのがクエーカーリズム、プラトン両者との出会いであった。

2. クエーカーリズムからの影響

オルコットは、家庭においてはエピスコパリアン教会（Episcopal Church）¹¹⁾に属す父母の影響を受けつつ成長した。父母ともにピューリタニズムには批判的であり、こうした彼らの姿勢が、オルコットの宗教的原体験に影響していることは想像に難くない。こうした意味合いにおいて、オルコットの思想は、その出発点より、ピューリタン的人間観とは相容れない方向に醸成されることが決定的であったともみなせる。

オルコットは初等教育を終え、青年初期には、経済的必要に駆られて南部に行商に出ている。この時期、オルコットのピューリタニズムに対する批判的傾向を強める決定的経験となったのが、南部のノースカロライナにおけるクエーカー教徒との交わりであった。オルコットは回想録でこの時期の南部への旅が、彼にとって高等教育で得られる以上のものを与えてくれたと語っている¹²⁾。

オルコットは、この土地で、クエーカーの指導者であったフォックス（George Fox,1624-1691）やウールマン（John Woolman,1720-1772）の日記をはじめ、次のようなクエーカー教に関する本を読んでいる。すなわち、ペン（William Penn,1644-1718）の『十字架なくして王冠なし』（*No Cross, No Crown*）、バークレイ（Robert Barclay,1648-1690）の『真のキリスト教神学にとっての弁明』（*Apology for the True Christian Divinity*）、ロー（William Law,1686-1761）の『重大な使命』（*Serious Call*）、クラークソン（Thomas Clarkson,1760-1846）の『クエーカーリズムの肖像』（*Portrait of Quakerism*）等である。こうした読書およびクエーカーたちとの交わりによってオルコットは、彼らの「内なる光」（inner light）に従った生き方に共鳴した。クエーカーの教義の核心であるこの「内なる光」は、個としての人間が、内面において直接神の声に耳を傾けることによって、神を知り得るという思想であった。

この「内なる光」という観念は、エマソンの「自己信頼」（self reliance）の思想にも通じるものであり、オルコットの場合は、幼児教育における子どもの良心に対する信頼という態度となって実践的に顕現した。

3. プラトンとの出会い

オルコットが古代ギリシア思想、殊にプラトン（Platon,BC.427-BC.347）の思想に初めて触れたのは1833年のことであった。「プラトンは私のヴィジョンを明瞭にしてくれた」というように、オルコットにとってプラトンに触れたことは、ある種の思想的革命であった。

この年の5月の日記には次のように記されている。「プラトンは、長い間読みたいと願っていた本であったが、翻訳書がでるまでは読めなかった。彼の本の中には、現存する思想と科学の光が十分に達することのできない偉大で深淵な考えがあると思っていた。こうした印象は、テイラーによって翻訳された彼の書物の断片を読むことによって確かなものになった。」¹³⁾そして1835年10月の日記には次のように記す。「誰もプラトンのことを非知性的だとは呼ばないだろうし、無益で無価値な夢想家の部類に数えないだろう。しかし、人は彼自身の魂のうちに、

彼自身の生命のうちに、プラトンのなかに不満をもっているヴィジョンの薄暗さを発見するだろう。純粹で、真の愛すべき、不変的な天才にとって、プラトンの思想は簡明である。単純な感情、純粹な生命は、経験的生活から人間の魂を深く理解するのと同じく、プラトンを読むために必要な資質である」¹⁴⁾。

こうした日記の書かれた19世紀の30年代の思想潮流として特筆されるのがロックの思想のアメリカへの移入であろう。ここに言う「ロックの思想」とは主として彼の認識論を指している。彼の認識論は、いわゆる「生得観念の否定」によって特徴づけられる。『人間知性論』(An Essay concerning Human Understanding)のなかで、ロックは次のように述べる。「あるひとびとのあいだでは、知性にはいくつかの生得的な原理があるということ、つまりある原初的な概念、共通観念、いってみれば精神がその存在のはじまりにおいて受けとり、世界へと持ちこんでくるような、こころに刻みこまれた刻印があるということが、確立された見解となっている。この想定があやまっていることを、公平な読者に納得してもらうために、人間がどのようにして、自然の能力のみによって、生得的な刻印のたすけを借りずに、人間が有している知識のいっさいを獲得することができ、そうした原本的な概念や原理を欠いても、確実性に到達することができるか、ということを示さずれば充分であろう」¹⁵⁾。ロックはこう語ったうえで、観念のもつ第一次性質の単純観念と第二次性質の複雑観念とを分け、知性とは経験に基づく前者から後者への観念の形成作用によってもたらされる結果と規定した。いずれにしてもロックは、観念を外的事物の記号として捉えていたといえる。

こうしたロックによる生得観念の否定は、19世紀当時理神論の立場にたつユニテリアン派の教義に強く影響したのであるが、彼らによってこの思想はピューリタニズムのもつ原罪説を否定する論拠として持ち出された。

17世紀初めにアメリカに宗教的な理由によって植民した人々の多くはピューリタンであった。ピューリタン社会においては、人々は常に神の下での自らの卑小さの自覚を出発点とし、徹底的な自己否定を通して、神の偉大さをたたえた。そして、彼らの信

奉する宗教的教義の中核は原罪説と予定説であった。この場合、「原罪」とは、生まれながらに継承するアダムとイブの墮罪ということで、ある意味で、邪悪に関連する生得観念と解することができるが、ユニテリアンを中心とした理神論者は、生得観念を否定することで原罪の呪縛から人々の精神を解放しようと試みたのであった。

プラトンの思想は、オルコットにとって、こうしたロックの精神白紙説を否定し、精神と物質との関係性を考えるヒントとなった。プラトンの著作を読み、オルコットは精神を究極的実在とみなし、物質を単なる精神の形式であり影であるように考えるようになる。

オルコットはまた、個人の魂は、それぞれの身体から区別され、外界の事物が魂や精神的様相の顕れであるように、身体は精神の単なる器と考えるようになった。魂は超越的であり、身体創造に先行して存在するものであるとみなされ、人間の身体を含む物質的なものはアイデアの単なる形式であり象徴とみなされるようになった。この時点で、明らかに物質は精神に従属するものと位置づけられていた。こうして1830年代のオルコットの教育思想では、後述するように、「精神の法則」を理解することの必要性が強調されることになる。

後年、超越主義の同志エマソンはプラトニストとしてのオルコットを次のように評している。「もしプラトンの神秘の世界の土着の人として生きたオルコットと知り合うことがなかったならば、自分はその世界を夢の国として取り扱うようになっていた、というとおおげさに聞こえるかもしれない。だが、そのプラトンの世界を、マサチューセッツ州のようにいくぶん地理的にも歴史的にも形ある実質的なものにしてくれたのは、ほかならぬオルコットなのである」¹⁶⁾。

Ⅲ. 超自然的思考様式の発展—自然は精神の象徴

哲学史上、プラトンは、超自然的思考様式を持ちこんだ点でそれ以前の自然哲学者から区別される。ちなみにこの超自然的思考様式の原理は、プラトンにあつては「アイデア」、その後、アリストテレスの「純粹形相」、中世にあつては「神」、そして近代

の「理性」、精神」と様々に変わることになるが、「反自然的」という意味での共通項をもっていた。

古代ギリシア早期、所謂「ソクラテス以前の哲学者たち」(BC.6~BC.5)は、万物を自然の範囲内で考え、それらの根源を自然のなかに探究する思索を行っていた。タレー (Thalēs, B.C.624-B.C.546) にはじまり、アナクシマンドロス (Anaximander, B.C.610-B.C.546)、ヘラクレイトス (Hērakleitos, B.C.540-B.C.480?) らがそれである。自然哲学の流行のなか、紀元前5世紀に、それらとは関心を異にする思想家として登場するのがソクラテス (Sokrates, B. C. 470-B. C. 399) であった。思想上、ソクラテスの思想は、プラトンの対話編によって後世に伝えられていることを考えると、厳密には、ソクラテスの思想とプラトンの思想とは不可分である。

いずれにしても、プラトン (ソクラテス) 以前の古代ギリシア哲学においては、自然はおのずと生成する生ける自然とし動的な存在として捉えられていたのに対して、プラトン (ソクラテス) の登場によって、自然を超えたところに超自然的原理を設定することで、そうした原理に従属する物質として捉えられることになった。プラトン以後、西洋文化圏においては、超自然的原理を参照しつつ自然を捉えるという思考様式が伝統となっている。

中世においては、周知のように、プラトンのイデア論は、アウグスティヌス (Aurelius Augustinus, 354-430) によってキリスト教に援用される。ここにおいて、イデアを来世に、現象界を現世として翻訳し、来世思想としてキリスト教は語られることになった。つまり超自然的原理の部分に「神」を代入することによって、キリスト教は中世においてその教義体系を整えていったのである。

こうしたなか、中世から近代への橋渡しとして、デカルトは、「神」の良識の出張所としての人間理性を設定した。超越主義者たちによっては、人間理性には神性が付与され、「出張所」というよりもむしろ、神の属性そのものと解された。オルコットは言う。「魂はすべて時として自分自身が神になるという可能性を感じる。魂は人間の内にとどまることはできずに、神のようになることを願う。……人間は神になるであろう」¹⁷⁾。

プラトンとの邂逅により、物質的なものに対する

精神的なものの優位性をオルコットは認めたものの、彼をはじめとする超越主義者のもつ自然観は、直線的にプラトニズムを踏襲したわけではない。その傍証は彼らの自然観に顕れている。

プラトンの自然観は、超感覚的認識で捉えられるイデア界と感覚的に知覚される現象界という二分された世界によって構成される二元的世界であったが、オルコットら超越主義者の描く自然はその一元性に特徴をもつ。オルコットの意味する自然は、人間の感覚を通して把握される物理的自然を含みつつも、人間の直観によって把握される自然であり、倫理的な意味も賦与されている。オルコットの自然観は、「神、人間、自然は一つの神聖な統合体であり、部分に分けることは不敬な行為である」¹⁸⁾、「自然は神を含むのではなく、神の内に含まれているのである」¹⁹⁾ という彼の言葉に示されるように、自然と神の連続性が一つの特徴をなしている。それゆえに自然は物理的自然でありながら、神性を有するものとして語られる。彼らの「自然」は、「存在」(Being) としてというよりも、むしろ「当為」を提示してくれるものとしての自然である。「…自然は、わたしから分離されておらず、わたしの身体と同じく、自然はわたしの一部である。真の生活の一瞬一瞬に、わたしは自然と一体であると感じるのだ。すなわち、わたしは自然の要素を通して呼吸し、心臓を鼓動させ、感じ、思考し、意志するのである。そして存在の一元性を知るのである」²⁰⁾。

こうした自然観で捉えられる自然は、「制作」(ポイエーシス) のための「材料」(ヒュレー) ではなく、精神の象徴として、人間と一体化され、さらにそれが神と一元的につながるといふ、プラトニズムの伝統とそれを受け継ぐ近代理性の範疇におさまる自然とは区別される。この点ゴッダートはいみじくも次のようにまとめている。すなわち「超越主義者たちの宇宙観は、神の内に統一された世界があり、また世界に神が内在するということであった。神が内在しているので、世界のどの部分も、たとえそれが小さなものだとしても、一つの小宇宙 (a micro cosmos) であり、それ自身の内に、存在のすべての法則、意味を理解することができる。個人の魂は、自然の精神と同一であり、自然の精神が含むものすべてを潜在的に含んでいる」²¹⁾。

こうした超越主義のもつ一元的自然観は、一部を東洋思想、わけても万有在神論的思想からの影響を受けている。周知のように、キリスト教文化圏においては、ピューリタンがそうであったように、神は自然と人間とを超越した存在として位置づけられる。それに対して、東洋思想の影響を受けた超越主義の自然観では、神と自然の関係は不分離であり、万物に遍在する内在神として描かれる。こうした自然観は、さらに人間を含めた自然の存在の善性の論拠となっている。超越主義者のなかでもエマソン、ソローは『バガバット・ギター』を愛読していたり、東洋思想に対し造詣が深く、自らの思想に東洋的な神観念も取り入れていた。思潮としてのまとまりがある程度鮮明になる過程で、オルコットの自然観、人間観、神観念も、間接的に両者からの影響をもっていたものと推察される。

IV. 自然を通じた自己放棄

上にみたように超越主義思想にあっては、自然観の一元性ゆえに、人間もまた自然的存在であると同時に、超自然的存在である。それでは、超越主義思想で説かれる人間陶冶の目的論とのかかわりでは、自然はどのように定位されるのか。

オルコットをはじめとした超越主義者たちの人間陶冶の目的は、様々な表現はとられるものの、一言でまとめるならば自己超越に置かれる。オルコットは1834年にボストンにおいてテンプルスクール (Temple School) を開校し、幼児教育の実践を行っているが、そこでの教育目的は次のように述べられていた。すなわち、「無限なる存在の内にある精神 [大霊] についてじっくり考えることは、これまで宗教と承認されてきた。外的自然の内の精神について考えることは、唯一真の科学であると広く認められてきた。われわれ自身の内にある、われわれの仲間の内にある精神について考えることは、社会的義務を明確に理解し、われわれ自身の内の賢明なる人間性を活気付ける唯一の方法であると考えられてきた。つまり、一般的な言葉でいうならば、精神についての考察は、人間的教養の最初の原理であり、自己教育の基盤である。この原理を、オルコット氏は非常に幼い子どもたちに適用しはじめたのであった」²²⁾。

オルコットは『人間文化の教義と学問』 (*The Doctrine and Discipline of Human Culture*) のなかで、「人間教育は、人間が授かり、所有している人間存在の真のアイデア (the Idea of his Being) を啓示する技術であり、彼の精神の成長、再生そして完成のために使えるようにするための技術である。つまり人間を完成させる技術である」²³⁾ と述べ、アイデアの解放のための技術として教育を捉える。こうしたアイデアは「天賦の才能」 (genius) として位置づけられることによって、人間にとっての生得的な本性と見なされる。このような基本的理解をもちながらも、オルコットは「われわれは欲求を満たすことによって肉体に捕われ、自己耽溺 (self-indulgence) によって感覚を曇らせるなど、あらゆる仕方で本性と生命を混乱させている。……精神のアイデアは意識から消え、本性はそれを外れて成長している。人間はアイデアの像を誤って受け取り、怠惰になってしまっている。彼は、内在する精神の聖域を放棄し、外界の王座を崇拝しているのである」²⁴⁾ という状況認識に立っている。プラトンが魂をこの世に生きている間は肉体に閉じ込められているものとして描いたように、オルコットもまた外界の可知的な世界にのみ関心を抱く、19世紀当時のアメリカに浸透した唯物論的な世界観の束縛を見て取ったのである。とりわけ30年代以降、当時のアメリカ社会に浸透した「物質主義」 (materialism) と「拝金主義」 (mammonism) とにオルコットは抵抗を示しているが、このような世情も手伝って、彼の超越主義思想は洗練されていく。1830年代から南北戦争前夜のアメリカは、ジャクソニアン・デモクラシー、「明白なる運命」 (Manifest Destiny)、ゴールドラッシュなどのキーワードが含まれてくる内政外交両面において充実期にあった。また、産業革命以後、資本主義的文明が発展することによって、特に都市部においては経済的にも潤った。そんななか、金銭に対する関心を生活の根本的で原理的な部分に位置づけることで享乐的な生き方をする人々も現れていた。当時の物質主義や拝金主義といった状況打破のためにオルコットは教育にその重要な役割を見出すようになるが、その方途として、彼の場合、個人に対して、精神的存在としての自覚と、それによる「自己超越」 (self-transcendent) を求めた。こうした自己

超越は、「精神的な生き方をする」ことと同義であるが、「宗教的に生きる」ことと同義ではなかった。オルコットにあっては19世紀アメリカにおける形式化し形骸化した宗教もまた、物質化されたものとして拒絶の対象となっていた。

オルコットが求める自己超越とは、要約するならば、自己を超越すると同時に、自己へと超越することである。すなわち今ある自己を否定しつつ超えると同時に、新たな個としての自己を定立するような超越である。オルコットは前出の『人間文化の教義と学問』のなかで「教育は靈感 (inspiration) でなければならぬ」²⁵⁾と主張する。この靈感でもって、人間の内なる精神と自然の精神を対応関係として見、自然とのつながりを持つ人間が、自然を通して自己内省するというのが、オルコットのいう自己超越の本分である。

オルコットが求める、この自然を通じた自己超越とは、個人的な霊知によるものであり、それは事物の本質を知ることを通してなされる覚知である。自然に内在する神性を個人的に体感することであり、それはほとんど知るといことは体験できても、他者に説明することによって伝えることは困難な代物である。

オルコットらもその流れのなかにあった近代においては、外在的な宗教的権威が否定されるか、もしくは人間の内に取り込まれる形で自らを律する近代的自己が描かれるようになる。これは19世紀ニューイングランドにおいて、先述したようにピューリタニズムの勢力が弱まり、理神論に立脚したユニテリアン等自由主義神学の台頭とも連動している。オルコットやエマソンが与した超越主義の思潮はこうした近代的自己樹立を説く一方で、とりわけ方途においては、究極的には自己教育を基本としながらも、自己限定、自己否定を契機とする自己超越を推奨した点で、近代から一歩先んじていたと言える。

さらに、超越主義は、哲学史全体に位置づけると、プラトン (ソクラテス) 以来、西洋的な思考様式を規定してきた、超自然主義的原理の設定による「生なき自然」という自然観に対するアンチテーゼでもあった。ここでいう西洋的な思考様式とはプラトニズムを意味するが、オルコットの 경우도、自らの思想構築に際し、プラトン哲学から多大な影響

を受けていたことは本稿で述べた。しかし、彼の場合、自然は超自然主義的原理に従属する客体ではなく、人間精神の象徴として、人間との連続性を有し、さらに神性が賦与された生ける自然として、人間の自己超越にとっての重要な契機を提供してくれる存在として扱われた。

プラトニズムを基調とする西洋哲学の伝統に対する本格的な批判は、19世紀末のニーチェ (Friedrich Wilhelm Nietzsche, 1844-1900) の登場を待たなければならぬが、エマソンら超越主義者の思想がニーチェに継承されていることはしばしば指摘されることである。

こうした西洋哲学の伝統に対するアンチテーゼを、人間形成論的にみたときには、超越主義思想は次のような特質をもつ。すなわち、彼らの「自然」肯定は、自己超越の契機として捉えられ、彼らの説く「自己信頼」の思想は、決して現実に拘泥することではなく、さらなる飛躍を求めて、自己陶冶を説くものである。その際に、自己を超越したところに超自然的原理として理念的な自然を設定するのではなく、人間の本性に理念的な自然を取り込むことで自己超越による自律の可能性をみていた点で、教育思想としても、自我と非我の分離という近代哲学思想的二元論を克服する試みがみられる²⁶⁾。

V. 結語—「超越」的視座への結実

以上、本稿ではオルコットの超越主義思想に着目し、近代哲学思想という「大きな流れ」のなかで、思潮としての超越主義が持ち得た妙味を明らかにすることを試みた。

オルコットの思想は、他の超越主義者と同じくカントによるドイツ観念論的認識論を基盤に据えながら、思想形成に際しては、クエーカーの「内なる光」観やプラトン哲学の影響を強く受けていた。このような影響は、ともに19世紀当時のアメリカにおけるピューリタニズムとその克服によって登場したユニテリアニズムとを克服する論拠を提供してくれたという意味合いで、重要度としては大きかった。

外在する宗教的権威によらない自律を打ち立てた点で、超越主義の中核思想は「近代的自己」に立脚する自己陶冶を旨とする人間形成論と見なされる。しかし、本稿でみてきたように、オルコットらが説

く自己陶冶は、外在的自然と内在的自然の対応関係を前提とし、自然を媒体としてなされる自己超越であった。人間を含めた自然のなかに宿る神性（エマソンはこれを「大霊」(over-soul)と呼ぶ)を意識することにより、今ある自己を否定し、あるいは自己を限定していくことを契機とする自己超越は、近代において、ややもすると独り歩きしがちな無根拠で無限定という意味合いでの自律的人間像を正す重要な視点を提供してくれている²⁷⁾。

プラトン（ソクラテス）以来、超自然主義的原理を設定し、理念と現象の世界を二分して捉える二元論的世界観は、キリスト教にも踏襲され、近代以降も西洋的思考様式にも受け継がれている。超越主義の「超越」的視座は、こうしたプラトニズムの超自然主義原理の性格を持ちながらも、超自然と自然と合一する一元論的な世界観を提示した点で、近代的思考様式を超える企図であったと解することができる。

なおこの度の考察の過程で十分には論考出来なかった課題として次の点が残っている。すなわち、超越主義の「自然」観が、後のアメリカ進歩主義教育の教育理論・実践にどのように受容され、また克服されていくのか。思潮のネーミングに示されるように、超越主義はカントの超越論哲学からの影響を受けることから思潮としての出発を切っているが、19世紀後半には思潮としての勢力は衰退し、同じドイツ観念論哲学でもヘーゲル主義の影響を強く受けたセント・ルイス学派に取って代わられることになる。このセント・ルイス学派が時系列的にみて、進歩主義と超越主義の橋渡しをする役割を演じているため、「自然」という切り口で超越主義—セント・ルイス学派—進歩主義という流れを眺めてみる必要がある。こうした課題については他稿に譲ることとしたい。

【注】

- 1) エマソン（酒本雅之訳）「超越論者」『エマソン論文集 下』岩波書店、1973年、p. 71-81。
- 2) 同上書、p. 71。
- 3) Frothingham, O. B., *Transcendentalism in New England, New York*, G.P. Putnam's Sons, 1876, p. 105.
- 4) M. カーティ（竜口直太郎・鶴見和子・鶴飼信成訳）『アメリカ社会文化史（中巻）』、法政大学出版社、1956年、p. 20.
- 5) Hoeltje, H. H., *Sheltering Tree; A Story of the Friendship of Ralph Waldo Emerson and Amos Bronson Alcott*, Durham, N.C., Duke Univ. Press, 1943, p. 53.
- 6) ワレンは「エマソンとともに、オルコットは自己信頼を実践し、精神の宗教を実践し、質素な生活と高邁な思想を実践した。彼の倫理学にとって、オルコットはカントやシェリングの形而上学ではなく、プロティノス、プロクロスの形而上学を前提としていた」と述べ、ドイツ観念論哲学よりも新プラトン主義の思想家の影響をあげている。
(Warren, A., *The Orphic Sage: Bronson Alcott, American Literature—A Journal of Literary History, Criticism, and Bibliography* vol. 3, 1931-32 (reprinted, Kraus Print, 1966))
- 7) Frothingham, O. B., *Transcendentalism in New England*, Goddard, H. C., *Studies in New England Transcendentalism* (New York, Hillary House Publishers, 1960)
- 8) Parrington, Vernon L., *Main Currents in American Thought vol. 2; The Romantic Revolution in America (1800-1860)*, New York, Harcourt, Brace & World, 1927. S・E・オールストローム（兄玉佳興子訳）『アメリカ神学思想史入門』教文館、1990年。
- 9) ペスタロッチからのオルコットへの影響に関しては、モンロー（Monroe, P.）は、オルコットをペスタロッチの教育学的信条の基礎を直接的には知らないペスタロッチ主義者とした (Monroe, Paul, ed., *A Cyclopedia of Education*, Vol. 5, New York, Macmillan, 1911, p. 154-155)。マカスキはオルコットとペスタロッチとの間に相似点を認めながらもオルコットによる実践の方が極端に人格的であったことを指摘し、オルコットがペスタロッチの単なる模倣者ではなかった

- としている (McCuskey, D., *Bronson Alcott, Teacher*, p. 35-39)。また、ウィルソンは、オルコットがペスタロッチよりもピタゴラス (Pythagoras, B.C. 582-B.C. 496)、プラトン、イエスからの方がより強い影響を受けていると指摘している (Wilson, John B., *Bronson Alcott, Platonist or Pestalozzian?*, *School and Society*, Vol. 81, No. 2053, 1955, p. 51-53)。
- 10) Haefner, George E., *A Critical Estimate of the Educational Theories and Practices of A.B. Alcott*, New York, Columbia Univ., 1937, p. 110.
- 11) この宗派は、人間性と罪悪とを結びつけるピューリタンの原罪観からは自由であり、とりわけアメリカ南部においては、その教義は日常生活における規律・道徳へと世俗化される形で浸透していた。
- 12) Shepard, O., *Pedlar's Progress, The Life of Bronson Alcott*, Boston, Little Brown & Co. 1937, p. 72.
- 13) Alcott, A.B. (Shepard, O. (ed.)), *The Journal of Bronson Alcott*, New York, Kennikat Press, 1969, p. 36.
- 14) Alcott, A.B. (Shepard, O. (ed.)), *The Journal of Bronson Alcott*, p. 68.
- 15) ジョン・ロック (大槻春彦訳) 『人間知性論 (一)』、岩波書店、1972年、p. 41。
- 16) Emerson, R.W. (edited by Orth, R. & Ferguson, A.R.), *The Journals and Miscellaneous Notebooks of Ralph Waldo Emerson, Vol. 11*, The Belknap Press of Harvard University Press, 1975, p. 184.
- 17) Alcott, A.B., "Orphic Sayings," *The Dial vol. 1, (July, 1840)*, New York, Russell & Russell, 1961 (reprint), p. 87.
- 18) *Ibid.*, p. 93.
- 19) *Ibid.*, p. 93.
- 20) *Ibid.*, p. 94.
- 21) Goddard, H.C. *Studies in New England Transcendentalism*, p. 4.
- 22) Peabody, E.P., Peabody, Elizabeth Palmer, *Record of a School--Exemplifying the General Principles of Spiritual Culture, Second Edition With an Explanatory Preface, and other Revisions*, Boston & New York, Russell, Shattuck & Co., 1836, p. i.
- 23) Alcott, A.B., *The Doctrine and Discipline of Human Culture*, Boston, James Munroe & Co., 1836, p. 3.
- 24) *Ibid.*, p. 20.
- 25) *Ibid.*, p. 21.
- 26) 詳細については次を参照されたい。山本孝司「超越主義の人間形成論--「自己陶冶」をめぐる」『九州教育学会研究紀要』第35巻, 2007, p. 29-36
- 27) ちなみに、こうした自己超越の考え方は、明治期の日本において、人間至尊の精神を啓発する一方で、人間蛆虫論を説いた福沢諭吉の思想のなかにも見出すことができる。

[Original Article]

Point of view of "transcendental";Unification of the naturalism and the supernaturalism in Alcott Education Thought

Takashi Yamamoto (Department of Social welfare)

[Abstract]

The principle of Transcendentalism in the 30s in the 19th century had influence in religion, literature, philosophy and a social reform. It has pointed out that German transcendental idealism has brought this thought influence, in connection with the word "transcendental," included in the name.

While the principle of transcendentalism in New England is influenced by a trend of such a history of philosophy in the 19th century, Transcendentalism shows different development from the idealism developed in Europe led by Germany. Idea about nature in the principle of transcendentalism that Nature is external expression of the human being mind, and it is God at the same time, is monism. At this point the principle of transcendentalism is different from German idealism philosophy.

This report clarifies a characteristic of the principle of transcendence as the trend of thought in modern philosophy thought,and focusing on thought of transcendental educator Bronson Alcott.

Keywords: Transcendentalism Supernaturalism nature self-transcendent Bronson Alcott